國に附與せられた赫々たる光輝に對し、感謝の念を懷き、神と人とに對しては何處までも謙遜である。

朝鮮慶州邑城に就て

文學士 小 田 省 吾

慶州は朝鮮の名邑なり。探勝の羈客常に跡を絶たず。然るに其の邑城の築造年代は東國輿地勝覽、東京雜記、増補文獻備考何れも之を載せざるなり。

高麗史を按ずるに、兵志城堡の條に曰く、

顯宗三年城慶州長州金壤

と。蓋し慶州築城の史に見ゆる最初なるべし。長州は今咸南定平郡の一部にして、金壤は今江原道通川なり。尙同書を按ずるに、地理志東京留守の條に、

顯宗三年廢留守官、降爲慶州防禦使

とあり。始め新羅國除かるゝや高麗は其の國都を

以て慶州となし、之に大都督府を置きしが、成宗の六年改めて東京留守とせり。是に至り留守官を廢して防禦使を置きしかば、始めて築城の必要を感じたるものなるべし。

次に舊奎章閣(今朝鮮總督府參事官室分室)所藏の慶尙道續撰地理志を閱するに、

府邑城 石築周廻四千七十五尺高十二尺七才

有軍倉、洪武戊午改築、

とあり、之に依りて始めて改築の年代を知ることを得たり。洪武戊午は即ち高麗末期辛禡王の四年にして、顯宗三年を去ること三百六十六年なり。

抑々慶尙道地理志並に慶尙道續撰地理志に付て

は嘗て朝鮮總督府囑託文學博士三浦周行氏之を世に紹介せられたれば、(大正五年十二月朝鮮彙報所載)朝鮮最古の地理書に就て(參照)、今改めて詳述するの要なきも、何れも固く府庫に藏せらるゝ珍書にして、世間に流布せざる所なるを以て、聊かに之に付一言すべし。

今を去る四百九十三年以前、即ち李朝第四王世宗七年各道に命を下し、各道府州郡縣歴代官號邑名沿革離合等を調査し、一定の規式に依りて撰上せしめ、之を材料として春秋館の史臣をして八道地理志を編纂せしめたり。其の當時各道より撰上せし地誌は悉く滅びて今知ることを得ず。獨り慶尙道地理志一冊のみ、永く慶州府に存置せられしが、幸に幾多の災厄を免れ、何時の頃よりか奎章閣に移藏せられて今日に及べり。又世宗が春秋館の史官に命じて撰せしめたりといふ八道地理志は現に世宗實錄中に收めらる、而して世宗の時各道

地理志撰上の命ありてより四十四年の後、第八王睿宗元年、更に同様の命を各道に下し、前回撰上せし地理志の遺漏を補ひ、且つ其の後の沿革を附加せしむ、此の續撰地理志亦悉く滅びて傳はらず、然るに是亦獨り慶尙道の分のみ今日に残存するを得たるは眞に僥倖と謂ふべし。但し兩種の慶尙道地理志現存のものは共に其の副本なること序文に依り明にして、何れも多年傳來の間に多少の缺損を生せるは惜むべし。睿宗が續撰地理志の撰上を各道に命せしより十二年後、第九王成宗十二年に至り、東國輿地勝覽五十卷成る。是れ即ち現時一般に流布する新增東國輿地勝覽の原本たり。されば睿宗元年撰上の分並に其の以前の地理志が勝覽編纂の資料となりしや殆ど疑を容れず。

今試に慶州邑城に關する記事を順次に列記すれば、即ち左の如し。

(a) 慶尙道地理志

慶州邑城 周廻六百七十九步、内廣二十五

結五十五ト井八十、

(b) 世宗實錄地理志

邑石城 周廻六百七十九步、内井八十

(c) 慶尙道續撰地理志

府邑城 石築周廻四千七十五尺、高十二尺

七才、有軍倉、洪武戊午改築、池三、井

八、冬夏不渴、

(d) 東國輿地勝覽

邑城 石築周廻四千七十五尺、高十二尺

内井八十、

右の内、邑城の周廻をば續撰地理志は尺に換算し（朝鮮里程一步は六尺なれば、六百七十九歩は四千七十四尺にして一尺の相違あり）、輿地勝覽亦之に據りしが、井の數、他書皆八十と記せるに獨り續撰地理志のみ八となせるは甚だ疑はし。惟ふに續撰地理志の正本には必ず八十とありしなるべく

現存の副本は書寫比較的粗末なれば恐らく八十を八に誤記せしものならむ。

慶尙道續撰地理志に掲げられたる「洪武戊午改築」以後の沿革は東京雜記（今より二百四十九年前、閔周冕補編）に左の記事あり。

邑城 石築周四千七十五尺、高十二尺、内

有井八十○徵禮門邑城南門也、火於壬辰兵

亂、崇禎壬申、府尹金湜重修、東西北三門

次第繼建、

之に依りて見れば、文祿役に加藤清正の率ゐる我第二軍が攻めて慶州を拔きたる際、又は其の後に邑城は大破損を蒙りたるものにして、邑の南門たる徵禮門を修築したりと稱する崇禎壬申五年は、實に文祿慶長役後四十年、洪武改築後二百五十四年なりとす。されば崇禎壬申（今より二百八十六年前）後、幾くもなく邑城の原形を回復したるならむも、其の後の沿革に付ては未だ之を知るの資

料を發見せず。邑城の西及北の兩方面が全部取拂はれて僅に東南の一部を存するのみとなれるは最近の事なりと覺ゆるも、其の何時頃よりかを詳にせす。聊か知り得たる所を記して探究の資となす。(本考材料の蒐收につきては加藤灌覺氏を煩したり)

地理上より見たる露國

文學士 下 田 禮 佐

露西亞平原 露西亞は世界第一の平原國である。其縁には、南に高加索山脈及び其續きなるクリミアの小山脈があり、南西にはカーパシアン等の新しい褶曲山脈があり、東には古生代の後期に褶曲した烏拉爾山脈あり、西北は低波狀地をなして居る婆羅的地楯に臨んで居るが、東南は幅廣き平地で亞細亞の平原と連り、西南はダニユーブ下流の低地と、西は北獨逸平原と何れも連續して居る。然し此廣大な「露西亞平原」は決して眞の意味の平原でない、河流の浸蝕作用は、其間に狭い谷を穿ち、又は廣い平原の間に極めて緩傾斜の側面を有する谷を作たりして居る眞の平原と云へば、浸蝕作用の未だ進まない分水界附近 河岸の洪涵平原、海岸平原等である。斯く露西亞平原と云ても、今は所々窪谷盆地等が出来て居るが、此等の成生する以前の狀態を考へて見ると、此大平原は極めて緩漫な波狀の地貌を呈する臺地であつた。今、平原の中部で平均海拔二百乃至三百米、カーパシアンの前線なるヴォルヒニア||ボドリアの高地で四百米、ドネツ高原、ヴォルガ下流の沿岸、グルダイ岡地、ミンスク附近等は三百乃至四百米であるが、之等は其元の臺地の殘つたものに外な